

フランシスコ会日本再宣教一〇〇周年記念

日本のフランシスコ会

1593〜1907

まえがき

十六世紀の終わりごろ、不思議な一連の出来事を通して、四名のフランススカンが日本で宣教師として働くようになりました。やがてその数は増えて行きましたが、一六九七年にそのうちの六名が三名のイエズス会士と一七名の信徒と共に処刑されました。それにもかかわらず、来日する宣教師は後を絶たず、彼らの伝える福音の教えは多くの人々に受け入れられました。一六一四年になると、迫害はさらに間断なく激しいものになりました。すべての宣教師は追放されるか、または殉教し、数え切れないほど多くの信徒たちが信仰を守りぬくために命を捧げました。こうして、キリスト教の痕跡は日本から跡形もなく拭い去られ、五〇年近く日本で働いた兄弟たちの存在は、まるで無駄であったかのようでした。

一八〇〇年代の中頃になると、日本は外国との貿易のために門戸を開放し、宣教師たちも再び来日を許されました。このときもまた、一連の予期せぬ出来事によって、一九〇七年、およそ三〇〇年ぶりにフランススカンが再来日することになりました。今年二〇〇七年は、その出来事の一〇〇周年記念に当たります。

最初の宣教地は北海道でした。やがて、宣教地は鹿児島や沖縄にも広がり、ついには、一二の外国の管区に属する一二の独立した宣教地が生まれました。これらの一二の宣教地が一つの日本管区として統合されたのは、ちょうど三〇年前の一九七七年のことでした。

この二つの記念祭を祝うにあたり、ここに簡単ではありますが、一五九三年に来日してから今日までの日本における小さき兄弟たちの生活の歴史をご紹介します。これは、聖ペドロ・パウティスタとその同志の初来日四〇〇年を記念して、一九九三年に書き下ろした小冊子を手直しし、書き加えたものです。基になっているのは歴史的書物から得た情報です。それを私個人の回想と解釈を加えてまとめました。

歴史を読み、考えるにつれ、信仰の先達に対する深い畏敬の念と感謝の念を禁じえません。最悪の状況下で主がそのご計画を成し遂げられたその神秘的ななさり方にも、深く驚嘆させられました。今日、状況はまたもや暗いものがあります。しかし、過去に予期せぬ道が開かれたことを思うと、日本のフランシスコ会の未来にも希望が持てるでしょう。

カリスト・スイニ

二〇〇七年八月二五日



目次

まえがき	3
一六〇一七 世紀	7
一六〇一七 世紀	7
一 始まり	7
二 到着	8
三 殉教	8
四 再建	9
五 迫害	9
二〇世紀初期	10
六 復活	10
七 フランスシスカンの日本帰還	11
八 北海道宣教地区	11
九 目標と方法	12
一〇 樺太(サハリン)宣教地区	12
一一 鹿児島宣教地区	13
一二 浦和宣教地区	13
一三 長野宣教地区	14
一四 第二次世界大戦	14
二〇世紀後半	14
一五 復興	14
一六 フランスシスカンの若返り	15
一七 一致に向けての動き	15

一八	フランシスコ会日本連合	16
一九	フランシスコ会日本管区に	17
二〇	管区としての発展	17
二一	会員の減少	19
二二	世紀に	19
二三	前に向かって	19
二三	未解決の諸問題	20
二四	今日の曲線	21

一六〇一七 世紀

一 始まり

最初のフランシスカンの来日は、「天が曲線で真つすぐに描く」ということわざの典型的な例である。予期もせぬ人、ありそうもない出来事、そして逆境、何よりも逆境は、神の国の到来のために特に選ばれた道のようにある。四〇〇年の間、日に出る国において本会はその道を歩み続けてきた。

ホアン・ポブレ・ディアス・バルドは、六八歳の高齢でマニラにおいて初誓願を立て、二、三カ月後にはマカオに行った。以前にマカオのフランシスカンたちから感銘を受け、巨万の富を捨ててフランシスコ会に入ったホアン修道士は、再び彼らに加わり、一緒に中国で新たな宣教活動を始めたいと望んでいた。しかし、マカオに行ってみると、兄弟たちの家は破壊されており、皆そこを去った後であった。まるでそれだけで打撃が足りないかのようになり、マニラへ帰る途中、彼の船は日本南部の平戸への迂回を余儀なくされた。そしてそれによって、だれも予想だにしなかったことが始まったのである。

二カ月の平戸滞在中、この老修道士の謙虚さと清貧に、土地のキリスト教徒たちは深く心を打たれ、マニラに宛てフランシスカン宣教師を送ってほしいと願う手紙を次々に書き送った。その願いは効を奏したものの、フランシスコ会が日本へ宣教師

団を送る準備をしている最中に、同国への福音宣教をイエズス会に留保するという教皇の小勅書が届いた。宣教師派遣は、一時の間は停止された。

ホアン・ポブレ修道士に深い感銘を受けた人は他にもいた。その人物はゴンザロ・ガルシアである。ゴンザロはインドでポルトガル人の父とインド人の母との間に生まれ、日本で八年の間イエズス会の伝道士として働いていた。彼はホアン・ポブレ修道士の生き方にあこがれて日本を離れ、マニラで小さき兄弟会に入会したのである。彼は後に、日本でのフランシスコ会宣教開始者の一人となる。

日本でのキリスト教宣教活動は一五四九年フランシスコ・ザビエルの到着によって始まった。それから五〇年も経たないうちに、イエズス会宣教師たちの熱意と聖霊の特別の働きにより、盛んなキリスト教運動が生まれ、いく人かの有力な地方大名たちもキリスト教に改宗した。一六世紀の終わりには、日本のカトリック信者は、三〇万人もいたと推定されている。権力者たちの政治的・経済的陰謀により、宣教活動は何度も中断されたにもかかわらず、百名以上の宣教師が、希望と決意と逆境の中の柔軟性を失わずに働き続け、信徒の数は増えていった。

フィリピンのスペイン人フランシスカンが将来有望なこの地に入るきっかけは、妙なことに、太閤豊臣秀吉の領土拡張政策によってもたらされた。当時、フィリピンも侵略の危険が迫り、マニラの総督は、一人の使節（ドミニコ会員）が海難で死亡した後、フランシスコ会のペドロ・パウティスタ・ブラスケス神

父を秀吉への特使として選んだ。

二 到着

一五九三年、ペドロ・パウティスタ神父は、平和条約交渉の特使とフィリピン聖グレゴリオ管区の宣教師という二重の任務を帯びて、日本の平戸へ向け航行した。バルトロメ・ルイス神父、フランシスコ・デ・サン・ミゲル修道士、それに摂理によつて与えられた通訳者のゴンザロ・ガルシア修道士が同行した。彼らは秀吉と公式会見することに成功した。秀吉はマニラとの平和協定に同意し、さらにフランシスカンたちが日本に残ることも許可した。やがて彼らは京都の一角に土地を与えられ、一五九四年一〇月四日、新しい修道院と教会を天使の元后マリアと命名し献堂した。

それに続いて修道院の両隣にそれぞれ五〇床の病院が二つ建てられた。その時以来、彼らはどこに行つても病人とハンセン病者の世話をした。この事や彼らの厳格な清貧と祈りの生活に惹かれて、大勢の求道者が修道院の門を叩いた。多くの信者は病人の世話や教理伝導を手伝い、その中のある人は、兄弟たちと日々の生活を共にするようになり、フランシスコ在世会に入会した。やがて宣教師たちの殉教に加わる協力者の中に在世会員も入っていた。

近年、一九八七年にフランシスコ会が京都中心街に得た土地が、まさにペドロ・パウティスタ神父たちの最初の施設の遺跡だったことを知り、兄弟たちは驚き感動した。そこに建てられ

たフランシスコの家は、祈りそして他宗教との対話のセンターとしてその精神を二一世紀に引き継いでいる。

三 殉教

新しい宣教師たちが一五九四年と一五九六年に到着したため、その小さな一団は長崎と大阪にも宣教の場を開くことができるようになった。そんなところへ逆境が訪れて来た。それは台風によつて日本へ打ち寄せられたスペイン船が運んで来たものである。カトリック教会の敵対者はその事件を利用して、宣教師の活動がスペインによる日本征服の準備だとの言い掛かりを蒸し返したのである。秀吉はフランシスカンとその直接協力者の逮捕と処刑を命じた。

六人のフランシスカン、彼らの協力者五人（その中に一二〜一五才の少年三人が含まれる）検挙された。捕らえられたフランシスカンは、スペイン出身のペドロ・パウティスタ・ブラスケス、マルチノ・デ・ラ・アセンシオン・デ・アキレ、フランシスコ・ブランコ、フランシスコ・デ・サン・ミゲル、メキシコ出身で、故国での司祭叙階のためにサン・フェリペ号に乗船していたフィリップ・デ・イエズス、およびインド出身のゴンザロ・ガルシアであった。イエズス会のパウロ三木と二人の伝道士も逮捕された。全員は左耳をそがれ、京都、大阪、堺の街を引き回された後、長崎まで二六日間の苦悶の旅を強いられた。旅の途中で二人の信徒が仲間に加わった。

長崎に到着した一五九七年二月五日の朝、彼らは港を見渡す

西坂の小高い丘に連れて行かれ、十字架に縛り付けられ、胸を槍で突き刺された。午前一〇時までには、二六人の殉教者はその犠牲を全うした。その場を目撃した人々は、殉教者が明るく、落ち着いていて、主に感謝し、居合わせた人々に永遠の命を望むように励ました、と語り、そして死に顔が美しかったと述べている。

ペドロ・パウティスタ神父とその同志たちは、一六二七年に列福され、一八六二年に列聖された。現在、その殉教の跡に建てられた教会と記念館は、これら日本で初めて信仰のために血を流した人々、そして続く年々彼らの模範にならった幾万の人々の記憶を守り伝えている。

四 再建

追っ手を免れた、兄弟ヘロニモ・テ・ヘスス神父は、ペドロ・パウティスタ神父から、地下に潜り信者たちを司牧するように命じられた。一五九八年、秀吉が死に、その後、徳川家康が時の権力を握った。マニラとメキシコとの交易を再開しようとした家康は、スペイン人の好意を得るために助けとなる人間を探していたところへ、ヘロニモ神父が日本にいたとの噂が耳に入った。徹底した搜索の結果、ヘロニモ神父は身柄を家康の前に引き出された。

結局ヘロニモ神父は、予期した殉教でなく、家康の使節の推薦状を書く仕事へと呼ばれたのである。お返しに、彼は日本に滞在することも、また江戸で教会を建てることも許された。そ

れは、現在の八丁堀に一五九九年に建てられた「ロザリオの元后聖マリア聖堂」である。後に、マニラでの交渉が挫折した時、家康はヘロニモ神父本人を派遣した。彼は將軍家康の要望を認めさせるのに成功したばかりでなく、一六〇一年、新しい宣教師たちと一緒に日本へ連れ帰ることもできた。ヘロニモ神父は日本のフランシスコ会の第二の創始者と考えられている。同じ年、彼は最初の兄弟たちが京都で立ち上げた病院で息を引き取った。

一六〇一年から全国的迫害の勃発する一六一四年まで、三〇人以上の兄弟たちがマニラとメキシコから日本に到着した。彼らは、一〇の宣教拠点と七つの病院、それに幾つかの巡回拠点を作り宣教活動を始めた。長崎の教会と病院を除いて、フランシスカンたちは主に大阪京都地域と江戸周辺を中心に活動した。後に一六一一年、ルイス・ソテロ神父が本州の北部(仙台地域)でキリスト教を初めて宣べ伝えた。ソテロ神父は一六一三年、仙台の大名伊達政宗によりマドリッドとローマに派遣された支倉常長の使節団を用意した。

五 迫害

何人かのキリシタン大名などによる策謀や、オランダ、イギリスの商人たちの反カトリックの中傷誹謗によつて影響された家康は、初期の寛大さから弾圧へと変わっていった。ついに家康は、すべての外国人宣教師を国外追放し、すべての教会を破壊し、すべての日本人キリスト信徒に信仰の放棄を強制する旨

の法令を發布するに至った。家康の命令は容赦なく冷酷に実行された。迫害の時に上長であったデイエゴ・デ・サン・フランシスコ神父は、日本からこのように書き送っている。「日本のフランシスカン宣教は一六一四年の始め頃までは非常に栄えていた。しかし、一六一三年に家康により公布され、翌年から施行された追放令の結果、この国のあらゆるフランシスカン施設が破壊された。」

迫害の間、フランシスカン二八人と、フランシスコ会律修第三会日本人司祭二人、それに数百人という在世フランシスコ会の人々が殉教の栄冠を勝ち取った。一八六七年、教皇は二〇五人の殉教者を列福したが、その内には一七人の小さな兄弟、一人の律修第三会の兄弟、それに約四〇人の在世フランシスコ会々員が含まれていた。一九八七年には、ドミニコ会家族の一六名の殉教者が列聖された。さらに二〇〇七年には、ペトロ・カスイ岐部と一八七名殉教者の列福が正式に決定された。

激しい迫害にもかかわらず、宣教師たちは絶えることなく来日し、また命を賭けてキリスト教を信奉する人も増え続けた。デイエゴ・デ・サン・フランシスコ神父は、本州北部について次のように書いている。「一六二六年には五千人の信徒がいた。三年後にその数は一万三千人以上に上っていた。」

江戸幕府は、ついにはすべての宣教師を消し去った。殉教した最後の兄弟は、おそらく一六四〇年に江戸で死亡したのである。しかし、その後も執拗なキリスト教徒狩り、殺害が強制背教かの迫害が続いた。そして幕府は、キリスト教の禁止、日本人の海外渡航禁止、海外貿易の徹底した管理体制であるいわゆ

る「鎖国」政策を確立することに成功した。だがどう見ても、キリスト教は根絶してしまっただのである。

二〇世紀初期

六 復活

一八五三年、ペリー率いるアメリカ艦隊の来航により、日本は外国との関係を新たに持たざるを得なくなつた。長崎、横浜、函館が海外からの船舶のために開港し、諸外国は船員や商人のためこれらの港に教会を建てることを許された。

一八六五年三月一七日、長崎の教会で、数人の日本人がパリ外国宣教会のプチジャン神父に近寄り、自分たちは彼と同じ信仰の者だと打ち明けた。それをきっかけに、カトリック世界に電撃を走らせるようなニュースがもたらされた。長崎での「信徒発見」である。何万もの隠れたキリスト教徒たちが二五〇年に及ぶ迫害の間、ずっと信仰を守り抜いていたのである。

ヨーロッパ各国からの圧力で、一八七三年、日本政府はキリスト教宣教のために宗教の自由を認めた。しかし、それは表面的なものであり、さまざまな規制や嫌がらせ、そして殉教さえもが、一九四五年の第二次世界大戦終戦まで続いた。カトリック教会では、最初はパリ外国宣教会だけがこの国の福音宣教を担当した。

七 フランシスカンの日本帰還

小さき兄弟会の二〇世紀日本到来は、最初の時と同様に裏戸口からとなった。最北の島、北海道でマリアの宣教師フランシスコ修道会付きチャブレンとしての着任であった。

フランシスコ会の総長は、モリス・ベルタン神父を派遣した。以前一八九五年、フランス海軍士官であったベルタン大尉は、長崎に上陸し、聖ペドロ・パウティスタ殉教の遺跡を訪れた際、自らがフランシスカンとなつて修道会を何とか日本に連れ戻そうと一大決意をして帰つたのである。翌年、彼はモントリオール（カナダ）でフランシスコ会に入会した。そして司祭叙階後、フランシスカンの日本帰還への関心を呼び起こすために書いた数々の手紙が効を奏して、彼の夢は実現したのである。

さらに、アフリカに宣教に行けなくなった、フルダ管区（ドイツ）のヴェンセスラウス・キノルド神父も、ベルタン神父と共に日本に行くよう任命された。二人は一九〇七年一月に日本に到着し、六月には二人のカナダ人兄弟、ピエール・ゴーチエ神父とガブリエル・ゴドボー修道士と合流した。キノルド神父は翌年、宣教地の長上に任命された。

北海道での先駆けであつた他の宣教師たちは、必ずしも皆が喜んで「よそ者」であるフランシスカンにその地を開いてくれたわけではない。とは言え、函館教区長であるパリ外国宣教会のベルリオーズ司教は、最初から兄弟たちに修道女たちのチャブレン以上の働きを期待し、発展中の都市札幌にある土地を彼らに与えた。そこで、近代日本での最初のフランシスコ会修道

院は、一九〇八年九月一四日に設立された。小教区も始められ、今日もなお兄弟たちがその世話をしている。宣教師が増えるに従い、司教はその管轄地域をさらに多くフランシスカンに委ねた。

八 北海道宣教地区

新しい宣教師たちがどんどん加わり、一九一四年に第一次世界大戦が勃発した頃には、その数は一四人となつていた。最初は国際的な宣教地区であつた。大多数はフルダから来ていたが、モントリオール（フランス人モリス・ベルタンとイギリス人一人を含む）やチロル、バヴァリア、メッツ、アイルランド、それにシレジアの諸管区からも兄弟たちが来ていた。

しかし、ヴェンセスラウス・キノルド神父は現実的であつた。「もし宣教地区を一つの管区に所属させなければ、誰もその維持に責任を持てもしないし、持とうともしないだろう」と主張した。一九一一年、北海道宣教地区はフルダ管区に任せられた。

聖座は一九一五年に同地区を知牧区（apostolic prefecture）とし、一九二九年には代牧区（apostolic vicariate）に昇格させて、キノルド神父を区長、ついで司教に指名した。

着任から五年後、兄弟たちは札幌に小神学校を開き、教区とフランシスコ会の志願者を受け入れた。

司祭と修道士の兄弟たちは増え続け、一九四〇年には三五人に達した。実際には、六五人以上の兄弟たちが着任したが、その数は死去、帰国あるいは他の宣教地への任命などにより、常

に減らされる目に遭っていた。彼らのほとんどはフルダから来ており、その宣教活動の範囲は、オーストリアに匹敵する広さの北海道だけに止まらず、隣接するサハリンにまで及んだ。

九 目標と方法

一六世紀以来、日本の土壌は根本的に変質してきていた。今度は、猜疑心と誤解で固められた岩地であったから、福音の種は容易に根を下ろすことができなかつた。改宗の一つ一つはどれも恩寵と勇氣の小さな奇跡であつた。

小教区教会が次第に各都市や大きな町に建てられたが、それらはただ単に礼拝の場だけではなかつた。どちらかといえば、活動拠点のようなもので、驚くほど様々な活動を繰り広げたのである。そこで、人々に出会い、友となり、理解を得るために、宣教師たちの想像力、才能、熱意で生み出し得る事は何でも行われた。このような活動を通して、それに彼らの貞潔と犠牲心の証しを通して、ゆっくりとしたペースではあるが、人々は彼らの言葉を受け入れるようになっていった。

兄弟たちは来日して間もなく、日本人が本来に必要としていたものは何かを悟つた。各目上は仏教徒であるほとんどの人は、キリストを知り、その救いの力を知ることにより得られる喜びと希望が欠けていたのである。であるからには、宣教師たちの主な目標は、イエスの善き知らせを広め、求める者に教理を教え、洗礼を授け、キリスト教徒の信仰を育てて、社会を内から刷新することができる者に成長させることであつた。

これらの方法と目標は、基本的には日本の小教区における使徒職全体に同じであり、現在に引き継がれている。

言うまでもなく、兄弟たちは人々の他の必要も目にして、病院や学校を建てたり、貧しい人々や打ち捨てられた人々の中で働いたりして、それに応えようと務めた。しかし、ここでもまた、兄弟たちは自分たちの仕事を通して人々が何らかの形でキリストと関わるようになるのでなければ、物足りなく感じていた。

一〇 樺太（サハリン）宣教地区

アグネルス・コワルツ神父（シレジア）は、一九一一年にサハリンを北海道から巡回し始め、後に他の兄弟たちと一緒にその地に住んだこともある。一九三二年、ゲラルド・ピオトロウスキー神父を長に、ポーランド人のフランシスカンたちがサハリン宣教地区の責任を引き受けた。一九三八年、同地区はフェリクス・ヘルマン神父を区長とする知牧区（apostolic prefecture）となった。

サハリンは気候の厳しさに加えて、宣教活動に課せられた厳しい制限のため、働くのが困難な土地であつた。一九四一年に外国人宣教師が強制退去させられ、一九四五年、ソビエト連邦の接収により宣教地区は消滅してしまつた。

一一 鹿児島宣教地区

北海道宣教地区が一九一一年にフルダ管区に委ねられた時、モントリオール管区が日本で独自の宣教地区を始める提案がなされた。これは一九二一年に実現した。モリス・ベルタン神父とウルバン・クルティエ神父は、日本最南端に位置する鹿児島県と沖縄県での福音宣教を引き継ぐため北海道を去った。

鹿児島県での宣教地区の総面積は北海道より狭いものの、日本と台湾の間、一〇〇〇キロにもわたって並ぶ島々に広がっていたのである。約三千五百人のキリスト教徒のほとんどが奄美大島に住んでいたため、兄弟たちはまずこの地での働きに専念した。

それからの一二年間に、カナダから新しい宣教師たちが三人着任した。人数が多かったものの、その内の何人かは死去したり帰国したりした。エジディオ・ロア神父が一九二六年に地区長に、ついでに一九二七年には、知牧区々長に任命された。ロア神父は、この地方の行政中心地である鹿児島市に移った。

フランシスカンの日本への帰還を発起した人モリス・ベルタン神父は、東京にフランス人兄弟による共同体を始める準備のため、一九二八年フランスに送られた。ここでまたしても、神のご意志は奇妙な線をたどって進められた。東京での共同体開設計画は変更されて、ベルタン神父はインドシナに派遣されてしまった。こうして、彼はベトナム管区の創始者ともなったのである。

一九二七年に管区となったばかりのモントリオールは、日本

で自立した組織体を発足させたいと望み、数箇所でも共同体作りに着手した。それで、東京の計画を引き継ぎ、田園調布に修道院を開いた。今日もなお兄弟たちがそこで宣教している。それに続いて、長崎の小神学校と修道院、さらに鹿児島県の共同体が開設された。一九三六年には、総長が正式に在日日本カナダ管区 (commissariat) を設立した。

一二 浦和宣教地区

一九三〇年代の領土拡張熱は日本軍を中国との戦争に駆り立てた。その状況の中で、軍部にとって、鹿児島及び沖縄諸島は戦略上重要であり、またそこにいる外国人はすべてスパイの可能性があるとみなされた。

反教会感情が助長され、残酷な迫害へ発展した。やがて宣教師たちは、最初に各島々から、最後には鹿児島からの退去を強制された。

そのように追い立てられた兄弟たちは、長崎と東京に配属され、また一九三七年には東京のすぐ北にある新しい地域へ派遣された。いまだ福音宣教が希薄だったその領域にとって、鹿児島からの追放は祝福をもたらすものであった。それは、埼玉県、栃木県、群馬県、茨城県からなる地域であった。

浦和市（現在のさいたま市）は宣教地区の中心となり、一九三九年にできた知牧区 (apostolic prefecture) の本部となった。アンブローズ・ブルラン神父が、在日本準管区長を務める傍ら、宣教地区の上長及び初代知牧区々長となった。

鹿児島兄弟たちの離散から、もう一つ思いがけない「副産物」が生じた。ジュスタン・ベルローズ神父は、他の兄弟と共に韓国に派遣され、そこでやがてフランススコ会韓国管区となるべきものの創始者となったのである。

一三 長野宣教地区

アグネルス・コワルツツ神父は、北海道宣教地区で働きながら、自身のシレジア管区の宣教地区を持ちたいと長い間望んでいた。一九三五年、彼と他の二人の兄弟には、東京北西にある、山の多い長野県の二つの小教区（松本と上田）が委ねられた。彼らは三番目の拠点として長野市にも小教区を開いた。しかし、間もなく戦争によって何もかも停止させられた。

一四 第二次世界大戦

日本の軍部がますますその影響力を強めていくに伴い、教会は宣教活動をさらに制限され、官憲の敵対的方針のために身動きが取りにくくなった。一九四一年、ついにすべての外国人教区長が、札幌のキノルド司教と浦和のルブラン神父も含めて、辞任させられ、日本人教区管理者が聖座によって任命された。日本の教会は、教区司祭に責任を渡す以外に選択肢がなかった。その時点では、宣教師たちにとってシヨックであったが、後になってみると、神意による土着化への後押しのように思われる。

第二次世界大戦の勃発と同時に、カナダ人宣教師は全員收容された。また、彼らが受け入れたばかりの日本人修練者一四人は、軍に徴兵された。ドイツ人兄弟たちは、抱束されなかったものの、その活動は非常に厳しく制限された。

戦時中、両宣教地区で、合わせて一〇人もいない日本人フランスカン司祭と修道士は、信徒たちが信仰を守るのを助け、教会と修道院を維持し、宣教師を支援するために英雄的に闘った。彼らに協力したキリスト教徒たちは、その勇気の報いとして官憲からの脅迫を受けた。

二〇世紀後半

一五 復興

一九四五年の終戦と共に、反キリスト教的な法律は廃され、四〇〇年の時を経て日本は初めて真の信仰の自由を謳歌することになった。何年かの間、宣教師も含め皆が食糧その他の生活必需品の不足に苦しんだ。しかし、肉体的飢えだけでなく、真理や生きる意味を求める魂の飢えも広がり、数多くの人がそれを捜し求めて教会を訪れた。日本で改宗者がたくさん出たと言うニュースは世界各地に伝わっていった。フルダとモントリオルから再び宣教師が少しずつ来日し始めた。さらに、日本人修練者の大半が戻って、新たに修練期を始めた。しかし、収穫のためにはもっと多くの働き手が必要であった。

一六 フランシスカンの若返り

ちよつどその頃、一九四八年から一九四九年にかけて、中国では、共産政權確立に伴い、宣教師が何百人も国外追放された。またも神の摂理の予期せぬ働きにより、これら強制退去させられた宣教師の多くが日本にやって来た。フランシスカンにとって、時の人はアルフォンス・シュヌーゼンベルグ神父であった。極東総長代理としてアルフォンス神父は、中国からの排除追放を日本の教会を再建する機会へと転換することに着手した。説得その他の、いろいろな手を用いて、中国から出て来た兄弟たち、それに他の諸管区から集めた若者たちを、数多く日本に送った。

日本に新しくやってきた兄弟たちは、北海道、浦和、長野にすでに存在している宣教地区に赴いた。何年も経たないうちに、これらの兄弟たちは母管区を説得して、人員を必死に求める司教たちと契約して、自身の宣教地区をもつようになった。一九五〇年～一九五六年の間に一〇の管区の努力の結果、合計一二の宣教地区がフランシスカンによって宣教師司牧されるようになった。一九五七年の統計によると、日本には二一五名の兄弟たちがいた。そのうち日本人兄弟は四七名で、七〇名は中国で宣教していた兄弟であった。母管区から若い兄弟たちが送り込まれ、物質援助も得て、フランシスコ会の受け持ち小教区は約一〇〇にまで増加し、キリスト教徒の数は飛躍的な前進を見た。

他の兄弟たちは、東京の三つの新しい重要な施設に赴任した。

それは、瀬田の聖アントニオ神学院（哲学神学共）、聖書の日本語翻訳と出版のためのフランシスコ会聖書研究所、それに、六本木の宣教師のための聖ヨゼフ日本語学院である。これらは、総長代理が設立し、スタッフを手早く揃えた。

この三つの施設は、長年にわたって大切な役割を果たして来た。日本語学院は優秀な教育で名声を得たが、新しい宣教師の数が激減したために、一九九八年に閉校となった。聖アントニオ神学院は、フランシスコ会の神学生を一〇〇人以上養成し、また他の修道会の神学生や修道女も養成して来た。同神学院は、教育の質の高さと修道生活の雰囲気のために高く評価されているながらも、修道者の急激な召命不足に悩まされている。聖書研究所は、エキクメニカルの共同訳聖書の翻訳に重要な支援を提供しながら、自身の注解付翻訳を完成させ、間もなく一冊にまとめた聖書出版する予定である。研究所の新作聖書は常にベスト・セラーとなっている。なお、その施設内の仕事だけでなく、兄弟たちは、使徒職の範囲を大学での講義、著作、研究などに広げている。さらに、アルフォンソ神父の下で、フルダ管区に属する福岡の志願院（ラテン語）とモントリオール管区に属する浦和の修練院が、日本のすべてのフランシスカンに利用されるようになった。一九五七年にアルフォンス神父はローマへ呼ばれ、フランシスコ会宣教師事務局長となった。

一七 一致に向けての動き

日本の教会が成長するにつれて、フランシスコ会に入会を志

す日本人の若者も多くなつた。彼らは、福岡の志願院、浦和の修練院、瀬田の神学院で充実した修道生活と神学養成を受けたが、養成が終了した後の彼らを迎えた状況は、しだいに問題視されてきた。

主な問題の一つは、日本人会員の所属する組織が日本にない、ということであつた。それぞれの志願者は、自分の出身地区を担当する海外管区の会員として入会して、養成が終了するや、その地区に帰るのであつた。海外管区に対する帰属意識と恩義の気持ちが強く、また自分の地区のことに夢中で、他の地域の兄弟たちについて知識も関心もほとんどなかつたのである。こうして、それぞれの地区では、小教区教会の司牧を中心とした福音宣教が優先され、小さき兄弟としての生活はその犠牲となりがちであつた。また、小教区以外の使徒職に携わることが望めない空気もあつた。

こうした事態は、教会と本会の「真の福音宣教は宣教地に修道生活を植え付けるべきである」という方針に逆行するものであつた。一二の独立した宣教地区は多くを達成したとは言え、フランスカン生活によつて高められた福音宣教を目指すためには、日本の地に根を下ろした、より統合された組織、及びより深い修道精神が必要であつた。

このことは、アルフォンス神父の後に総長代理を引き継いだアポリナリス・ファン・レーウエン神父にとつて明らかであつた。彼は、日本および全アジアにおいて、海外管区から独立したフランスカン組織母体が必要だ、と精力的に主張した。やがて本会が「管区」と「準管区」というものを創設したのは、

主に師の先見の明が認められたことによる。また一九六七年の総会においても、その後も、アポリナリス神父が粘り強く説得活動を続けたことに拠るところが大きい。その後、主にいわゆる第三世界の各地で、規模こそ小さいが成長する見込みが大きい組織母体が次々と新しく設立されていき、総会などでその代表者となつたアジア人やアフリカ人が着々と数を増やして、本会が世界規模の兄弟共同体であるという自覚を強く深めていった。

その頃、日本にいる兄弟たちの間に、それぞれの宣教地区を統合しよう、という動きが広まり始めた。それは、一九六三年に新しく総長代理となつたシグフリード・シュナイダー神父により推し進められた。ところが、話し合いを重ね、総本部の宣教事務局長が激励に日本訪問したにもかかわらず、一致統合に関して兄弟たちの意見は決して一致統合を見なかつたのである。独立した組織体になるという提案は、大勢の兄弟たちには水の上を歩くという呼びかけのように見えた。またある者には、元の創始管区への放蕩息子子の拒絶のように思えた。福音宣教に支障が起ると案ずる者もあつた。賛成の者でさえ、多くの兄弟たちは時期尚早であると感じていた。

一八 フランススコ会日本連合

一九七〇年二月、このように気乗り薄の日本のフランススカンたちに対して、総長のコンスタンティノ・コーゼル神父は強力な後押しをした。総長は、「新しい総長代理のカリスト・スイ

二神父の第一の仕事は、統合に向けての交渉を完成させることである」と発表した。すべての兄弟と話し合っても埒が明かかなかったので、同年一月に、二宣教地の地区長たちは、「フランススコ会日本連合」の結成を決定した。翌年一九七一年、正式に連合が発足したが、それは、フランススコ会においては、修道会としても初めての組織であった。カリスト・スイ二神父が初代会長に選ばれた。

連合の中で、二宣教地区はその自治を保持し、以前と同じく海外管区に所属していた。しかし三つの目標、すなわち、具体的な協力によつて精神的な一致を促進すること、フランスカンの生活を改善すること、そして完全な統合に向けて準備することは、皆の賛成を得ていたのである。連合は、その六年間の存続期間中、兄弟たちが互いに知り合い、信頼しあうことができるようにという大役を果たした。

一九七四年、連合はフランススコ佐藤敬一神父を会長に選出し、管区設立のゴールを三年後と設定した。宣教地区にとつて統合が受け入れやすいように、複数の共同生活の場を持つ地区には相当の自治を与え、新しい管区の「分管区」とすることを総長が提案した。

一九 フランススコ会日本管区に

一九七七年二月一六日、小さき兄弟会日本聖殉教者管区は、二宣教地区の内の九つの地区が入籍することで創設された。その八年後（一九八五年）、北海道の旭川地区が日本管区に入籍

したことによつて、日本全土は一つの管区に統合された。フランススコ佐藤敬一神父は初代管区長に任命された。佐藤敬一神父は、一九八三年に任期終了し、一九八五年に新潟司教となった。第二代管区長はピオ本田哲郎神父（一九八三—一九八九）が務め、その後はアンドレア福田勤神父（一九八九—一九九五）、ヨアキム前川登神父（一九九五—二〇〇一）、ミカエル湯沢民夫神父（二〇〇一—）と引き継がれてきた。

管区創設時の総長の提言通り、日本管区は入籍したそれぞれの地区を「分管区」として船出した。これは兄弟たちのやる気を引き出すことには成功したが、各地区の自治が一致を妨げるものだと分かった。そのため、一九八六年の管区会議では、これらの分管区を地域修道院へと格下げすることが話し合われるようになった。その後、一九九二年の管区会議において全ての地区は修道院となることが決定された。

兄弟たちは新しい管区が出来たことに満足していたが、自治権について妥協したために枠組みが作られただけであった。内実として真に一つの管区としての兄弟共同体と呼べるものを打ち立てるには、さらに何年も辛抱強い努力が必要であった。

二〇 管区としての発展

管区の創設と発展はさまざまな形を取った。最も目に見える変化は、責任のある諸役職を日本人兄弟たちが担ったことである。会員の構成も変わり、外国からの宣教師が多数を占めていた時代から、日本人が多数を占める時代へと変わった。

フランススカンの生活様式とメンタリティーの面でも、意識変化が静かに起こっていた。連合の時代から今日に至るまで、あらゆる年代の兄弟たちが、さまざまな形で、生活様式と福音宣教の両面でフランススカンらしさとは何かを考え続けている。最初、このような検討は、ほとんどの兄弟にとって時間の無駄のように見えた。なぜなら、彼らは自分のことを後にも先にも宣教師であると考え、フランススカン生活のことなど修練期以来ほとんど考えたこともなかったからである。しかし、日本管区が設立されてからは、こうしたアイデンティティに関する考察はもつと広く受け入れられるようになり、今では生涯養成プログラムの本質的部分を成すまでになっている。その結果、兄弟たちはフランスカン・アイデンティティというものをゆつくりではあるが確実に再認識するようになってきた。そして、日本の各地から集まっているということもあって、兄弟たちは同じ管区に属する兄弟としての意識を深め、絆を強めていったのである。

一九八〇年代になると、日本の兄弟たちは、貧しく底辺に追いやられた人々との関わりを深めるようになった。何人かの兄弟たちは、大阪の釜ヶ崎と東京の山谷地区で長年にわたり、日雇い労働者、貧しい人々、ホームレスなどに交じって特別な活動を続けていた。今度、会全体が「貧しい人々の優先」をモットーとしていたために、日本のフランススカンたちも、別な形の不正や差別、そして貧困に対して目を向けるようになった。行動と質素な生活様式によって、そうした不正や差別、貧困に苦しむ人々と連帯するようになるとの呼び掛けに、多くの兄弟たち

は熱心かつ具体的に応えた。残念なことに、そうした熱意を、自分のこれまでの仕事や生活を否定するものと捉えた兄弟も多く、対立が生まれた。その結果生じた分裂もやがて徐々に相互受容へと変わっていったが、そこに至るまでには何年も要した。この経験は苦しいものであったが、おそらくそれは成長に必要な過程だったのであろう。

また、管区の成長が目立ったもう一つの面は、海外宣教に目を向け、他の管区に一四名の宣教師を派遣し、物的支援も行うようになったことである。特記すべきは、一九八二年に五名の兄弟をアフリカ・プロジェクトに送り込んだことである。

それと同時に、管区の執行部では、兄弟たちが共同生活を送れるような場所を作るために力を注いだ。しかし、この考えは独り暮らしに慣れていく多くの兄弟たちにはなかなか受け入れられなかった。共同生活を妨げる更なる要因に会員数の減少があり、このため多くの司祭の兄弟は、二、三の小教区を掛持ちせざるを得ず、その結果、兄弟的な共同生活のための時間は奪われた。

一九七八年に、祈りを中心にしたリテイロが軽井沢で始められた。その重要性は理屈ではわかっていたものの、実際に参加した兄弟はわずか一握りで、二〇年後には閉鎖された。

兄弟共同体の発展を長いこと妨げた最大の難問は、おそらく経済的にばらばらであった点であると言える。つまり、宣教地区の兄弟の収入はその地区に属し、その使い道もその地区の兄弟が決めるというものであった。年月が経つにつれ、宣教地区の兄弟たちの姿勢も幾分変わり、地区は管区本部の運営と養

成の費用及び共通の建設基金のために資金を分担することに同意し、年次会計報告書も提出するようになった。こうした段階を経たおかげで、相互信頼と日本全体の兄弟会に対する責任感が深められていったが、財布のひもをだれが管理するかという大きな問題（会計を管区として実質的に一つにするという課題）は手つかずのままであった。

二一 会員の減少

フランシスコ会への入会を希望する日本人の数は年々少なくなってきた。召命の減少は、一九五〇年代半ばに始まった教会的成長の停滞と密接につながっている。第二次世界大戦後の十年間に、カトリック信者の数は毎年一人かそれ以上増えた。しかし、社会の経済状態が悪くなり、一人当たりの国民所得が増えるに伴い、大人の受洗者数は減少し、ようやく自立を保つレベルの四人程度にとどまっている。この五〇年間、日本人カトリック信徒の数は全人口の〇・三%にすぎない（プロテスタントとカトリックの日本人信徒数を合わせても約一%にすぎないが、二〇〇〇年頃を境に外国籍の信徒数が日本人信徒数を上回るようになり、日本の教会は以前にはなかった課題に取り組んでいる）。幸いなことに、この事態に促されて、福音宣教の広い意味が理解されるようになった。人数は二の次であり、大切なのは、キリストの福音を生きること、社会の価値観を変えること、そして貧しい人々や底辺に追いやられた人々と連帯して生きることであることが認識されるようになったので

ある。

修道生活への召命も同じように減少傾向をたどった。この問題をさらに深刻にしたのは、戦後のほとんどの小教区や学校、慈善事業を始め、そこで働いていた外国人宣教師の数が四分の一になってしまったことである。

この間、多くの兄弟が天国へ、あるいは母国へ、あるいは自身の世帯へと去って行った。一九七〇年には日本に二六五名いた兄弟の数が、その後の三〇年間に五〇%以上減少し、将来の見通しは明るくない。状況は世界の先進諸国のどの管区でも似たようなものである。鋭い見方をする人は、この主な原因を、修道者が安定とか成功という世俗的な価値観を広く採り入れるようになったからだと言っている。フランシスコ会の歴代の総長たちは、この問題の唯一の解決策は創立時への回帰であると考えている。すなわち、生活様式においても福音宣教の方法においても、祈りと小ささと兄弟愛に根ざした新しい方向に向かうこと（再創立）である、と。しかしながら、日本の兄弟たちは、変化が突き付ける挑戦に立ち向かうことがなかなか出来ずにいるように見える。

二二世紀に

二二 前に向かって

日本の兄弟たちは、以上のような一見解決不可能に思われる

重荷を引きずりながら、二一世紀を迎えた。二〇〇一年の管区会議で管区長に選ばれたミカエル湯沢民夫神父は、六年の任期の間に次の管区長と執行部のために負の遺産を精算しようと思つた。

最初の仕事は、すべての地区の会計を管区で一つに統合することであつた。二〇〇四の管区会議で、三年以内に全ての会計を統合することが正式に決定された。統合は順調に進み、二〇〇七年春にはほぼ完了した。それにより年次会計決算報告書と予算書が精査のために提出され、認可される仕組みが定着した。これは画期的な前進であつた。ついに日本管区は名実ともに管区となつたからである（宗教法人の統合はまだ終わっていないが、これは手続き上かかる時間の問題にすぎない）。

また別の分野では、多くの兄弟が思いがけなくも共同生活を好意的に受け入れる態度に変わつていった。高齢の兄弟たちを受け入れ、世話をしようとする兄弟共同体も増えた。兄弟的な共同生活だけでなく、兄弟共同体として福音宣教する在り方へと変わつていく兆しが見え始めた。これが仮にわずかの試みにとどまつているにしても、メンタリティーの変化は紛れもない事実である。

生涯養成の面で、よく準備されたプログラムは、この三年間に五回実施され、各兄弟はその内の一回参加することになつていった。プログラムの内容は二〇〇三年の総集会の成果、さらに二〇〇六年の臨時総集会の準備と成果を取り入れたもので、さらに二〇〇七年の管区会議の準備にも役立つように工夫されていた。それで、すべての兄弟が管区の将来のための企画立案と

決定に関わることが出来るようになった。

二三 未解決の諸問題

二〇〇七年の兄弟の数は、海外にいる八名の宣教師の兄弟も含めて二二一名（日本人八五名と外国人三六名）である。聖フランシスコの生き方に惹かれてフランシスコ会に入会する若者は毎年一人か二人はいるが、長続きしない者が多い。新しい外国人宣教師は極めてまれである。三五年前に今よりはるかに若い二六五名の兄弟に委ねられていた教会や施設の大部分を、今では二二一名の兄弟が、それ以降に作られた新しい施設も含めて、引き継いで行こうと頑張っている。統計予測から見ても、人員が減少し続けるのは明らかである。

人手不足を痛感させられるのは、特に小教区司牧の分野である。兄弟たちは七〇近い小教区を任されているが、その中で常住の司祭がない教会も多い。日本のすべての司教区が同じような人手不足に悩まされている。問題は単なる司祭の数ではない。常住の司祭がいなくても、活気を保ち、成長して行けるような、教会を引っ張って行く信徒の数が大幅に足りないことが問題なのである。

注目すべき例外はあるにしても、司祭個人のリーダーシップに長い間頼つてきた小教区では、信徒が受け身で、教会に司祭がいなくなると活気がなくなる傾向がある。しかし、今は、司祭による指導の在り方をもっと緩めて、その元で信徒が自分たちの小教区で自ら福音を宣べ伝える者となり、小教区を運営し

ていけるように育成するための大きな奮闘が必要である。もし、現在より数少ない司祭が積極的に活動する信徒のために司牧的世話をし、一般的な方向付けをするようになれば、より健全な教会につながるはずである。

二四 今日の曲線

最近の兄弟たちは、かつては乗り越えられないと思われた障害を克服して、目覚ましい進歩を遂げきた。しかし、兄弟たちが高齢化し、人数も先細りする状況の中で、今ある大きな問題と課題に立ち向かい解決する力を兄弟たちは持っているだろう

か。

この問に対する答えは、聖パウロのコリントの信徒への第二の手紙にあるように思う。「キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう」(一一：九)。もし、兄弟たちの現在の非力な状態を聖パウロが述べている態度で受け入れるならば、それこそ神が兄弟たちを新しい生き方と福音宣教のあり方へと導く道となりうるのである。神は再び曲線で真つすぐに描こうとされているのではないだろうか。



日本のフランシスコ会 1593 - 2007

(Friars Minor in Japan 1593-2007)

著者：カリスト・スイニ, ofm

翻訳・発行：フランシスコ会日本管区

発行日：2007年10月6日

106-0032

東京都港区六本木 4-2-39

聖ヨゼフ修道院

03-3403-8088

<http://www.ofm-j.or.jp/>



100th Anniversary
Franciscan return to Japan